

ワークショップ

「大腸カプセル内視鏡の Clinical practice」

- 座長 齋藤 豊（国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院内視鏡科）
小林 拓（北里大学北里研究所病院炎症性腸疾患先進治療センター）
基調講演 大宮 直木（藤田医科大学病院消化管内科）
特別発言 田中 信治（広島大学大学院医系科学研究内視鏡医学）

座長の言葉

カプセル内視鏡が登場して以来、長い期間にわたってその主たる活躍の場は小腸であった。しかしながら大腸カプセル内視鏡が 2014 年に保険収載され、その応用は大腸疾患に広がった。主とした対象は大腸内視鏡困難例に対する癌・ポリープのスクリーニング・サーベイランスであり、挿入に関する問題点解決の糸口となる一方で、前処置の量や保険適応の問題など課題もある。

一方で、本邦でも増加し続けている炎症性腸疾患、特に潰瘍性大腸炎に対して大腸カプセル内視鏡を応用する試みもなされている。本ワークショップでは、大腸カプセル内視鏡の実臨床における工夫や成績を、腫瘍・炎症にかかわらず広く募集し、そのより有効な臨床応用を議論する場としたい。